
ホラーリン

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホラーリン

【ZPDF】

Z0975F

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

シックスセンスを持つ男イチマツこと（九割打撃）は、自分の勘を信じて会社をやめ、記者になることにした。しかし、その会社はイチマツが思っていたようではなく、ホラー映像記者にならざってしまった。しかし、いい先輩や友達ができる……。

【プロローグ】

「私、ヤマトは本日をもってこの会社を辞めます」

「今までよく頑張ったね」

「いやー、社長僕は運命に従うまでです。僕は第六感を信じていますから」

僕には第六感があった、題名をシックスセンスにしてもよかつたのだけど、この小説にはリズムというものがある、この小説なりの平凡な日常を超えて、僕はいつもと違う仕事に就くことを第六感に勧められた。

スーパークレーン記者……。

「スーパークレーム記者ってここですか？」

僕は中に入った。もう契約済みだ。

「よく来たねえー、誰でも間違えるんだよ。よろしく頼むよ、打撃君」

そう、僕の名前は九割 打撃。

「この会社の打撃王になってくれたまえ」

「ああ、もちろんです」

結構強引な社長だ。どんどん会社の奥へ引っ張られる。

まあ、意外と几帳面な会社だ、なぜなら片付いている。それに仕事もはかどっているようだ、ランキング表があつたから分かった。推理すると、ずばり僕の仕事はたいしたことない。でも、それがいいってことは第六感でわかっているのだ。

「君の机はここ、ちなみに君の所属する部はホラー記者部だ。君にはバットで幽霊と戦つてもいい」

「えーーーー、本当に？」

「あの、何かの間違いじゃ」

「君の実績は聞いていたし、君の能力があれば確実にホラーブームが巻き起こる。前の会社でも有能だったんだから、できる」

決め付けられてる、まつ分からぬんだから分からぬで先輩使
えぱいいよな。

「分かりました」しぶしぶ。

「あだ名は何がいい?」

「イチローかな」

「じゃあ、松井って言つのはどう?……待てよ、そりだイチマツ
つていうのはどうだろ?」

「いいですね、それ」

振り返ると社員の一人が良いと言つてゐる。

「この子はこの社でも優秀な情報部に所属してゐる。サカベ君だ」

「サッカー? ベツカム?」

「おい、イチマツ、早速仕事だ」

「さすがわが社員、情報の伝達はリニアモーターカー並だ」ポンと
肩をたたく。「がんばってくれたまえ」

ここからいろいろなところに行つてホラーを味わうのだろう。第六
感は卒業だ。

翌日も通勤。

「俺は双務だ。いろんなことを聞いてくれ」

双務は同じホラー記者部。

しばらくしゃべつてコミュニケーションしていると、知りたかつ
た情報が分かつた。サカベはサッカーとベツカムじゃない、ただの
名前だつていうこと。どうしようもない事実だ。

「野球もうまいんだろ?」

「それより、この部つて六人じゃないんですか?」

「幽霊が一人いてね」

「幽霊? 詳しく聞きたい。」

「それはどういう?」

「奇跡を起こせるたつた一人の助つ人さ」

「じゃあ、僕は名前の通り野球がうまいです。甲子園に行こうと思

つたくらいですから

「でも無理だつたのか

「まつ、運がなかつたんです。僕はそれをトラウマに運を磨いてきたんですよ」

「じゃ、その運で競馬を当ててくれないか。経費が足りなくてさ」「運で博打かあ、いいつすよ」

今外見でいて思つた。世界は広いんだなあと、どうしちゃつもない不良、美しいカップル、このビルからはいろんな人が見える。

「当たつた、すごいよイチマツ」

「あつそうですね。でも努力もせずできることがあるつて恨まれるんですよ」

「悪いことをしたな、情報を止めとおくれよ。これでも社の中で一番の情報屋と友達なんだ」

「僕は、そんなことをしてもうために会社に来たんじゃありませんよ。情報なんてどうでもいいんです。僕にはすべきことがある」「盛り上がつてるとこひすまない。社長からの仕事」

「あつ、ワン！」

「どうした友よ

抱き合つ一人。

またしても僕は世界の広さを突きつけられた。今見ていることは今だけのことだ、忘れてたまるか。

「ゴニヨンゴニヨン」

「はあーん、オッケー

……

「情報操作は俺の仕事だ。お前はお前らじへやればいいんだよ

「うん、怒つてごめん

「気にすんなよ

……

「ここから新しいスタートが始まる気がする。
「キヤー」と叫ぶ練習をしておいてくれ。ホラー小説の名に懸けて。

「プロローグ」（後書き）

是非是非、感想を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0975f/>

ホラーリン

2010年10月14日12時51分発行